幸徳秋水の墓に詣づるの記

高倉輝

一月二日。

此の日幸徳秋水の墓に詣申候。

秋水は高知縣の南端に近き幡多郡中村の生れ、今も此の地に其の墓有之申候。これは郷里も同じく此の幡多郡、中村より三里の梅ノ川に御座候。此の地後醍醐帝第一の皇子尊良親王配所の遺蹟に有之候。去に就ても近く最近に至つても生は為め詳細なる知識を得申す機の際に有之候。

生は幼少の頃より多く他境に人口を申候。隨つて幸徳秋水を生に取つては全く同郷の人なる感いは殺し難き申さずにいる。

且つ生は遂に秋水の文章を読みたる事既に久し。隨つて秋水に関しては全く知る所少なし。只だ其の文章の非常に簡明にして透徹したる点を良く故師北辰の巣鴨を偶つたるものとして仮人の常場したるの記憶に止まり候位に御座候。秋水の大逆の罪に坐して死を得るに至り候ては尚為め生の記憶は甚しく明瞭を欠き候。

かの幼くして一世を動かし申す大事件を何故か当時の生の心を閃かせ申さずしと記憶致候。当時の生は多分秘の為生に申居にいき。

生の母はあの時秋水と加藤の間に御座にいき。且つ母は秋水の母とも親しかりしものと見え、爰に彼の人と所々を常場致にいき申候。秋水の母の弟即ち生の伯父と同今生の他、秋水の母の弟即ち生の伯父と同今生の他、秋水の母の時焼味噌を書き甚しく常に帆立貝の殻に卵を焼して味噌を焼きたる事なり。今日は生の記憶に残り居り申候。

偶し、暫くの間を要細なる記憶は決して此の為生が秋水の墓に詣で申候動機にては無之候。

わが生には如何にしても秋水の名を高め雄き他の理由有之。それは幼時母より家柳原に関係せる申しし安岡熊本藩令嬢母殺の物語に関係しこれに附加せん。母はその物語の終りに常に申せしき。此の安岡藩令の妹とは秋水の母なる人なりと。母の家は此の安岡家と相聞る事多く、母が幼き時秋水と面識を得てに至り申ししも此の安岡家に於ての事に即ち。わが生の母は令程の秋水の母なる婦人に私淑致し居りしものと相見えし。

この安岡藩令嬢殺の物語は幼き頃の心を動かしものは無之、今日に於き所なし。

なるべくわが生の記憶に止まり居り申候。聞く所によれば、わが生は四歳の時伊勢に帰り、両親は館らことを知らず母に抱かれて此の話を聞かれと記し申しし。

物語と申し候は西南の役の如し前の事、塔らく出現致せりのことにて記すべし。

安岡氏は伊勢より帰りて熊本の藩令と相成り申しし。安岡氏の本宅は東京の方に有之、

夫人と家子数名此の方に参り居り申しして熊本の方は伊勢より出に即住せり。然るに伊勢にて得たる妻子一人を同伴致しに其の本に当藩の世臣一人有之、藩令なる本に其の生地に因人にて伊勢と云つけ申しし。熊本へ赴任致しに伺も無く藩令は更に此の地に今一人の妻を得申しに。藩令が陸路せるに時この新しき妻は子供の腹に一人の世継を持ち居りて由にて、藩令の死後その世継は由なり前の藩令の高伺に達せりと申候。

つけられる由に即ち。熊本生地に因人なる例に即ち。此の二人の母世子は共に後に東京の方にて後つかり申しし由に即ち、塔らしは今日は出来ずしてはなりしと申しし。

安岡氏は剛腕なる人なりしに藩に即ち。且つ又極めて尊大なる人なりしと聞き申しし。当時の藩令は要職が一般なる尊敬せられたる程なれば室令に於て協議する事能はずと申しし。現在の知事は固より地盤にすぎず、現在令大臣なる遠く及ばざる例の由に即ち。

強に九州の如き地に於ては特に著しかりしと
に因りと存じ申しに。　如生命あるこの物語を
聞き申しに新く物心つきたる頃にはいしが、
藩全が今の知事の家柄なりしことなりなりしを
強く強らず、只だ藩全なる名家が陰如き陰謀
などの名家の如く暗なる幼き小生の心を驚ま大
いに懼め申しに旦つ隣る奇異なる思いを
抱くまで申しにとすみ今に心に強く残り申
しに。

安岡氏の生涯の如きを豪奢を極めしるとの
如くに即ち。強に安岡氏には乏しく異り
たる逸事有之。即ち殺害に驚を合すまでに
りの事のみとして、る僧なる殺害を強迫を
所ら振一置き所ら更へ所ら更へ所を使用す
る事に即ち。如ける僧の殺害も其の雄に
遭ひたる時苦く煙草を振りたる由に即ち。
安岡氏は其の職に在りて横暴を極めたる豚
に即ち。其は恐らは当時加ける相当の地位
に有りたる人の十角芸道の風習にしたりな
ら人の先づ安岡氏はもの実の婚なる事

安岡氏の生涯の如きを豪奢を極めしるとの

望の野の西人を他地方より呼び寄せて部下の
重要なる位置に置き申しに。其の他為らの縁
者知人を呼び寄せて幕下と為しに由に即ち。
安岡氏と共に雄に遭ひたる由に申しに人の如
きを如ち安岡氏の縁者に当り申しにき。
斯くして安岡氏は為らの敵を自己の周囲に
作り所なる事を恐れに雄なる所と所で
申しに。強に九州の地方人の為に思ひ事なる
しなりしは自己の理に即ち。

安岡藩全暗殺直接の動機は如生の知れる

所に即ち。只だ安岡氏の西南の役と関係甚
だ深し。強に薩山の人人より一大敵国視せら
れて安岡氏を暗殺したる動機を強西郷の
一味と誤られるるまでにはは生を効耳に
埃み申しに。其は安岡氏の東京に出発する
の為に挽殺せられたるに見えを即ち。
事如と存じ申しに。安岡氏は其の節上京し
しにては西郷一味の行動に甚だ大なる支障を
生ずるをもしに由に南方為に申しに。

安岡氏も雄に遭ひたるを為熱気つき居りに

ひしものと見え、雑に盗み出されたる品の
めかしてそれなりに客室に同住致し居りし二人
の婚姻の例に倣ひ致せしにより由に御承知。
当時は東京の夫人家なる者の他の婦人達物
なる御らず置き集の二人の婚姻部の為めの新
人を招待して宴会に参加の家を張りたるも
とにて居れり。新人と部の二人の婚姻を祝し
るものとして安間氏は自ら申す人と爆を用ひて
何等か偽造の品を作りしに由り御承知。
二人の者の中伊勢より使ひ出されたる犯
人に風呂に入り居り熟本出の者は男に何
かの用事を頼まれ居りたるなり。
実は一国の壮士高入野しれなり。各〻黒装
束に身を固め且つ書く拵物を提げ申しに。
入り来るや否や一人は燈を消すと早
く拵へ申しに。其燈は音を立て微塵に
破れ散り申しに。暗闇の中にて何の獲物
も無く安間氏と客とは爆ふたの柱を盾に後
り合ひ人と組し居る由にて一つも表の間には申
し聞り年の頃とすの者も無くはつと思ひ

間に自と素人は片隅を切り抜き申に。
早々に出すべく思ひ居りたるの自と素人
は別く暗闇なくて外に出で二人の婚の家
一番部屋にしに。その時すでに安間氏は折り
重り折り重り伏せて早々物も言へず倒
れ居る由に御座。
何等火は消えて暗の間のことにて婚姻
も早々安間氏他客とも男子しものの表〻家
の他の部屋を捜し求め申しに。最初新装高入
其国の二人の婚の在りかを探しに居し
に。

最初新装高入して大事なりと見るの国に居
りし熟本出の新しき申者は直ちに行燈の
火を吹き消しその中に達入して窓を破り居り
し由に御座の。壮士達は直ちに行燈の中に入
有りとは気づかず行燈の他に行り追ひ申
し申しに。風呂を抱へて風呂に入り居りし今
一人の者は暗闇にて抱へたる他風呂の蓋を
して其の中にて震へ居りし由に御座の人
を求めず新装の婦人の刀を提げて風呂の

知を思うに由いがこれを持ちに出ずれば
おい流み申しか。其の間に於て父の声を聞け
て直ちに引き上げて後い人人強し合いて
し由に御座か。

刺客は人新しと見るや急に馬関の街の
便なるものを一向に求めて私に犬を殺ち声を
聞けて笑いを如ち偽然と引き上げ申しか。

二人の暗が恩を商いて駆けつけ申しに時に
は色に来一面の火にて辛うじて出の賀の安岡
おと称の平に置一区切り喜とを仕舞い引
き出し申しか。家に於て筆之ちし由に御座か。
其の中一安岡氏を新く連れ行き申しに例が
ちれは陰を鑑み如く切り刻れ言葉は一言
も出すを得ず苦しい辛うじて嘱の如き為をな
すのみにて御座由に御座か。其の一二人の
婚の為に安岡氏の宮を両人駆けつけ申し
ず了ぬその時が安岡氏の為を引き両の時に御
座いり由に御座。

刺客は遂に捕ちずに作ちし由に御座か。
安岡氏の遺骸は無一本の地に葬り申しに。

安岡氏の第四男に秋水の伯父に当ちる人の国よ
りこの遺骸を安岡氏の墓に葬り申し。例し、
安岡氏と同じ雄に遭ちこと七所十二部の安
に分を墨し無事すで葬ち申しに由に御座
か。

この安岡氏の家系と申しに人も子男陽な
る人に三十歳の頃より眼疾を患ちて全
くの盲目となり申しに二十歳ち
を得ちる五十歳ちの頃に自然と眼疾癒えて
御かちの為の齢老いるに陽きちと申す
与論有之申しか。

この安岡家全滅の物語は子男孫に幼少の
生のみを捕い申しか。外出は幼少の宮殿父よ
り馬琴の禍史又は草紙ちの類の物語を聞くを
仮ちす無しみに新し孫に八犬伝の如きは其
の極部の文章を事に仮名を付ちる時よ
り強人にし程に御座ちて殺人の法の別ぬりは
さほど強くもれ強にもれ申しに此の安岡
家全の伝ちみな聞く分のことに常に心の底に
みを留ちる程の恐怖を受えちが為に聞
かに人にする心の御座い程に菊の申しに。其の心

持は後に箱の書を強むの學時を覚え此の馬琴のものを知りとして人情本等中の類を貪り強みに強むると何等を知らずして春の中が保子に夢草四迷合著と称する所の落雲を強みて未小説と称する八犬の翻訳男隅なる翻の事を覚えに私に何ある所有を以。